

札幌都市研究センターの牽引車

萩 本 和 之

元札幌都市研究センター理事

日本人の気質には二つのタイプがある。上昇志向で、勇猛果敢に一発勝負する「漁師」型と、地道に周りに配慮しながら、コツコツと積み重ねる「百姓」型だ。十亀昭雄先生は、中川郡美深町出身であることも影響してか、典型的な「百姓」型であった。名寄中学（現名寄高校）を卒業後、一九四六年に北大の予科は農類に入學し、四八年に文類へ変わっている。このことも思想形成の骨格となっているようにも思う。温厚でいつも笑みを絶やさず、学究の徒でもあるにもかかわらず、「リベラル左派の草の根伝道師」として書齋に閉じこもらず、主に道内各地を行脚して、民主主義や自治の基本を分かりやすく説いて回った。それは後年、趣味としたマラソンと同じように、黙々と自らに向きあい、自らを信じて走り続けていた。

十亀先生が都市研究センターと係わるきっかけとなったのは、七四年に札幌市長候補に浮上したことからだろう。一月三日の紙面で翌年の統一地方選で社会党と札幌地区労が十亀先生を擁立の動きを始めた、という内容が報じられた。六〇年代後半から労働者側や弱者の立場に立脚した誠実な言説を新聞や講演で披露していた十亀先生なので、既に北海道新聞記者となっていた筆者は「さもありなん。当然だ」という感想を抱いた。実は十亀先生の前に北海道新聞編集局長の鈴木正人氏（日本の労働組合の草分け・友愛会創始

者、鈴木文治さんの二男）が市長選挙への出馬を要請されている、と社内での噂を耳にしていた。その名前が直ぐに消え、候補者選考が混迷していたから、市長候補への期待が高まった。だが、四〇代の新進気鋭の研究者として学究への情熱、意欲も満々だったためか、公明、共産との全野党での選挙共闘が出来なかったことも響いたのか、ご本人は固辞され、夢はついえた。

しかし、この擁立話が伏流水のような格好で十亀先生の理想郷ともいえる都市研誕生へと繋がっていった。革新系候補は七五年、七九年の市長選でも負け、八三年には横路孝弘北海道知事選挙に集中する、として市長選はついに「不戦敗」を選んだ。だが「このままでは駄目だ」と当時の札幌市労連の大長治興書記長や札幌地区労の重野廣志事務局長、堀川輝男事務局次長らが選挙前の八二年から「八七年の市長候補選びに先行して、市民サイドに立った包括的な政策をつくるための研究センターを」と動き出した。山口哲夫釧路革新市政の「知恵袋」で、元札幌市職員組合連合会の運動家でもあった富永巖氏を呼び出し、組織化する運びとなった。

市民と研究者、そして「縁の下の力持ち」としての労働組合の三者が協働してのユニークな都市研組織だけに、学識研究者が大きなキーポイントだった。そこで、研究者の中心人物として人望が厚

い十亀先生が浮上した。十亀先生も出馬辞退の負い目を感じているかのように、全面的に協力、精力的に東奔西走した、という。札幌都市研究センターの活動記録集「30年間の歩み」の中に収録されている三代目理事長の山本佐門北海学園大学教授や二代目副理事長の蓮池穰札幌学院大学名誉教授ら関係者の座談会の中でも、異口同音に「十亀先生が誘いにいらつしやらなかつたら、都市研活動には参加したかどうか、分からない」と述懐している。

そして十亀先生の努力のいかいもあって理事長に当時北大教授の小関隆祺先生、顧問には道政調査会の川村琢先生、北海道地方自治研究所の矢島武先生のお二人。理事には山本先生や蓮池先生ら当時の良識派の研究者が一堂に結集。八三年七月三〇日に札幌都市研究センターが発足の運びとなった。

設立時に副理事長だった十亀先生は、五年目の八八年から二代目理事長となり、一六年間務めて、都市研二〇周年を機に引退した。その間北大時代の学友、富永常務理事とは名コンビで、札幌市幹部や市民運動家らを招いての月例研究会を軸に、都市研の基礎を固め、牽引（けんいん）していった。

研究者集団としての都市研は、常に直接選挙運動には係わらなかった。しかし、札幌市政に対しては「官・行政優位で、それが役所の中からの市長が続いたことで構造体質化している」という危機感を共有していた。十亀先生も「市民の中に生き生きとした市政への発言なり、参加が少ないわけは、戦後札幌には自治的な政権交代が一度もないからで、市民が市政なり、他者の立場から見ると、という視点も持ちにくく、問題意識さえも希薄になっている」（八六年発行の研究会報告集「札幌都市研究第1集」座談会から）と指摘し

ている。

それだけに、二〇〇三年に再選挙の末に上田文雄市政が誕生したことは、十亀先生にとっても都市研にとっても長年の悲願であった。地方政府の政権交代が実現した日であった。

自らの活動や成果をひけらかす術（げん）学者ではないものの「昨年は都市研究センターの調査研究活動の最後の壁だった市政政権交代が実現され、明るく活発な上田市政がスタートした」（〇四年発行会報二四五号）と喜んでいた。そして「市政の多様な担い手相互間の生き生きした緊張関係を土台に、札幌市政風土のためまぬ改革の前進と市民的成熟を改めて期待したい」（〇四年発行会報二四三号）と、さらなる飛躍に期待を寄せていた。

都市研は十亀先生のご逝去よりも約一年早い二〇一二年七月に三〇年間の活動の歴史に幕を閉じた。しかし、その間月例研究会は二七四回を重ね、会報は三四四号、研究会報告集も一〇号まで発行した。ほかに記念集会や市民フォーラムなどを催している。

十亀先生は二〇〇七年にご長男が亡くなり、心身ともに衰弱されるまでは、研究例会に元気な姿を現していた。都市研の解散は社会状況の変化などの要素が大きく影響しているものの、十亀先生が御出席されなくなり、センターの軸を失ったことも響いた、と感じているのは筆者だけだろうか？

さらに十亀先生の後を追うように、二カ月後の二〇一三年七月二八日に都市研最後の理事長だった山本先生が不慮の事故で亡くなった。いま右傾化が憂慮されている。今こそ、都市研の灯明を引き継ぎ、提言を強力に発信する運動体が求められている。